Humanitarian Innovation Forum Japan 2016

— イノベーションで世界を救う、持続可能な創発プラットフォーム —

私たちのビジョン

開発・環境、災害・難民支援、医療・衛生分野など、国際的な人道的支援の緊急性がかつてないほどに高まっています。既存の手法のみでは、増え続ける問題に追いつくことはもはや不可能です。現場では、これまでにないイノベーションの実行が必要とされています。

本年5月にトルコ・イスタンブールで開催される世界人道サミットでは、イノベーションによる人道支援改革が重要テーマとなります。人道支援に携わる数多くの国の中で日本は、その中心的役割を果たすことを世界から期待されています。しかしながらこれまでは、現場で活動している人道支援の実践者と、技術やアイデアを持つ企業とが協働できる場は多くありませんでした。そのため、世界を大きく変えるはずのイノベーションの可能性が、人々に届かないままになっています。

いま私たちは、人道支援にイノベーションをもたらし、世界を変えるための持続的なプラットフォーム作りに取り組みます。その実現のためには、支援実践者、企業、大学、政府、国際機関、すべてのアクターの協力が必要です。

技術とアイデアを世界のために。皆さまのご協力をお待ちしています。

2016年1月　人道支援イノベーション協働準備会 (JPHIL)

企業の皆さまへ

今般、開催する Humanitarian Innovation Forum Japan を意義あるものとするためには、世の中に価値をもたらすサービスの開発や業務の改革に日々努められている、多くの企業の参画が鍵だと考えています。

人道支援の課題について企業はどう関与できるかを考え、継続的にイノベーションを生み出せるプラットフォーム構築に、NGO・NPO等の市民セクター、政府・自治体・大学・国連機関が連携して取り組んでいきます。

これまで企業各位からは、各NGO・NPO、またジャパン・プラットフォーム（JPF）、国際協力NGOセンター（JANIC）などのNGOネットワークを通じ、「こういう技術は人道支援に使えないだろうか」「ローカルパートナーとの組み方が分からないので、まずは日本のNGO・NPOと組みたい」というお声をそれぞれ個別に頂いてきました。しかし各NGO・NPOは各地の人道支援現場で活動しているものの、個別の技術やイノベーションを必ずしもうまく適用できている状況ではありません。それはこれまで、ニーズにソリューションをどう適用するかという知見が政府セクター・市民セクターともに十分に蓄積できていなかったこと、そして現場と企業をつなぐ人材が不足していたことに起因します。

これまでも日本発のすばらしいイノベーションが実現できた例はあるものの、企業単独の努力や地縁などによる個別性に依存しており、人道支援の場においてイノベーションが継続的に生まれ続けている状況には至っていません。その状況を打開するため、技術やアイデアを持つ企業の協力により、人道支援の現場にイノベーションを継続的にもたらす枠組み（人道支援イノベーション創出プラットフォーム）を新たに構築することが私たちの目標です。

第一回目となる今回のフォーラムは、このプラットフォーム構築のプロジェクトのキックオフです。イノベーションは、必ずしも新技術の適用のみを意味せず、現状を打開するための新しい発想も重要なイノベーションだと考えます。そのため特定の専門技術だけではなく、普段のビジネスの場で実践されている、業務改革などの知見もまた重要な要素です。

本プロジェクトは人道支援活動の一環ではありますが、持続可能であることが重要です。目指すゴールは、人道支援の各プロジェクトが単独事業としても成立するような、支援する側・受ける側ともに恩恵が得られるような持続可能な枠組みづくりです。企業とNGO・NPOがどのように協働すれば良いかという知見を獲得し、日本発のベストプラクティスとして世界に発信できるような長期のプロジェクトを目指します。

皆さまの積極的なご参加、そして国内・世界の人道支援活動への温かいサポートを心よりお待ちしています。

Humanitarian Innovation Forum Japan 2016 実施概要

2016年1月22日 JPHIL

日時	2016年3月13日（日）10:00 - 20:00 （フォーラム後の意見交換会含む）
場所	東北学院大学　土樋キャンパス 8号館 押川記念ホール（仙台市青葉区土樋1-3-1）
参加費	無料
対象	NGO・NPO、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン加盟企業、JPF賛助企業、経団連加盟企業、イノベーション提供企業、地元企業・団体、大学、国際機関等
主催	ジャパン・プラットフォーム（JPF）、国際協力NGOセンター（JANIC）、防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）、東北学院大学、外務省
協力	国連OCHA、支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク（JQAN）、[調整中：JICA、仙台市、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン]
事務局	人道支援イノベーション協働準備会 (JPHIL: Japan Partnership for Humanitarian Innovation Leaders)
申込	http://goo.gl/forms/ZXERBRUpzu　[申込期限：2016年2月19日（金）まで]

■フォーラムの目的

Creating Shared Value (CSV) の考えのもと、セクターを超えた協力体制により、人道支援に持続的にイノベーションをもたらすプラットフォーム作りに着手する。今回のフォーラムはそのためのキックオフとなる。

「人道支援イノベーション創出プラットフォーム」は、支援現場の問題を把握し、企業が持つソリューションを活用して人道支援にイノベーションをもたらす場になることを目指す。このプラットフォームは、適切な人材による高度なファシリテート機能によって効果的に運営される。今回のフォーラムでは、まず「人道支援の場にイノベーションを生み出す方法論」についての仮説づくりと検証を実施する。

具体的な人道支援課題をテーマとして設定し、NGO・NPO、企業、政府・自治体、大学、政府・国際機関など多様な関係者によるグループでソリューションについて話し合い、企業内の技術やリソース、NGO・NPOの知見などを活用してどのようなイノベーションを生み出しうるかを検討する。そしてその過程を振り返り、進める中で上がった課題の改善点を検討し、今後のモデル構築のための手がかりとする。また、実際に有望なイノベーション案が提案された場合には、その後のフィージビリティスタディにつなげ、イノベーションを実現させることを目指す。

本フォーラムの成果については、2016年5月にイスタンブールで開催される第1回世界人道サミットにおいて「イノベーションによる人道支援改革」に関するの日本での事例として発表する予定である。

また、本フォーラムの前日（3月12日）には「仙台防災未来フォーラム2016」（主催：仙台市）が開催されることより、一連のイベントとして参加者間の相互出席や交流を促す。仙台市は2015年3月に開催された第3回国連世界防災会議を受け、防災フォーラムを15年間続けて開催することを予定しており、本イノベーション・フォーラムもそれに連動して継続させる。

■世界の人道支援を取り巻く背景と課題

第1回世界人道サミットに向けた議論の中で、「イノベーションによる人道支援改革」は4つの重要テーマのひとつとして設定された。ここで強調されているのは、イノベーションは単に新技術の採用ではなく「問題解決プロセスの革新」を表す概念であるということである。

人道支援の効果を高めるためには継続的にイノベーションを生み出す必要があるが、現状ではそのための積極的なアクションや投資がなされていない。偶発的にしかイノベーションがもたらされていない事態に対し、世界人道サミットでの議論を通じて大きな警鐘が鳴らされている、といえる。

世界人道サミットの事前会合において、継続的にイノベーションを生み出す基盤を実現するためには以下の要素が必要であると指摘された：

- **被災者の目線に立った、既存の人道問題の整理と優先付け**
- **人道支援のイノベーションに関心を持つステークホルダーの積極的な協力**
- **イノベーションを生み出すプロセスへの投資**
- **イノベーションマネジメント（エビデンス、評価、IT導入、リソース活用）の向上**

国連OCHA（人道問題調整事務所）によれば、現在、紛争による難民、また災害の避難民として住居を追われている人は世界中に約6000万人存在し、その数はフランスやイタリアの総人口に匹敵する規模である。これらの人々の平均避難年数は約17年と長期化しており、大きな人道的危機となっている。また、自然災害によって毎年約2億人以上が影響を受けており、経済的な損失は年間約36兆円に達する。この事態は、これまでの手法で対処できる規模ではなく、全ステークホルダーの英知を結集し、新しい解決法を実現するための革新が必要とされている。

しかしながら、人道支援においてイノベーションを継続的に生み出すプロセスを確立するためには、以下のような問題が指摘されている。

- **人道支援の現場ニーズが正確に把握されておらず、マッピング・優先順位付けが不十分**
- **意欲と能力のある、ニーズとソリューションを取り持つコーディネーターの不足**
- **持続的イノベーションを生むプラットフォームが存在しない。現状では有志の技術コミュニティ等の活動に支えられているが、リソースや資金は常に不足している**

本フォーラムを含むプロジェクト全体で、これらの問題を解決し、企業とNGO・NPO、政府や国際機関が協力して継続的なイノベーション・プラットフォームを構築することを目指す。またプラットフォームの機能を高め、ファイナンス面でのサポート提供によりさらに多くのイノベーションを生み出すため、政府、民間、国際機関等が共同で出資する人道支援イノベーションファンド設立の研究も進めたいと考える。

■本フォーラムの進め方

今回のフォーラムは人道支援イノベーションを生み出すための方法論を確立することが目的である。そのために、人道支援現場での具体的な問題テーマを設定し、実際にイノベーション案について検討する。データ収集などの準備段階も含め、その過程をモニタリングすることにより作業の中で浮かび上がってきた課題を整理し、イノベーション考案の最も適切な体制と進め方を探っていく。

今回取り扱う課題は、国内・国外の両方を対象とする以下の4分野から設定する。この4分野の中から、具体的に絞り込んだテーマを事前に提示する。

テーマ設定のための4分野

① 防災・減災
② 水・公衆衛生
③ 災害後のビルドバックベター（より良い復興）
④ プロテクション（人道保護）

それぞれの分野において、人道支援現場のテーマを設定し、現在の状況や改善点を提示した上でフォーラム参加企業に事前共有する。

例：
①防災・減災　→「災害時の被災状況やニーズの迅速な共有」
②水・公衆衛生　→「正しい手洗いの習慣化と普及方法」

フォーラム当日、3〜4社の企業およびNGO・NPOから構成される小グループにて、テーマに関してディスカッションし、各社の持つ技術やノウハウ、または全く新しい発想を用いてイノベーションを生み出せないかを検討する。グループを構成するメンバー企業はテーマに近しい業種がベースとなるが、自由な発想を生み出すために異業種からの参加も歓迎。

グループセッション前半では、テーマにおけるイノベーションの発案そのものについてグループごとに議論する。後半では、前半セッションの振り返りを行い、何が問題だったか、今後どのようにすればイノベーションを生みやすくなるかの方法論について議論する。

レビューすべき項目例：テーマ情報の妥当性、各々の問題への理解度、アイデア発案の過程、議論のファシリテート・進め方等。

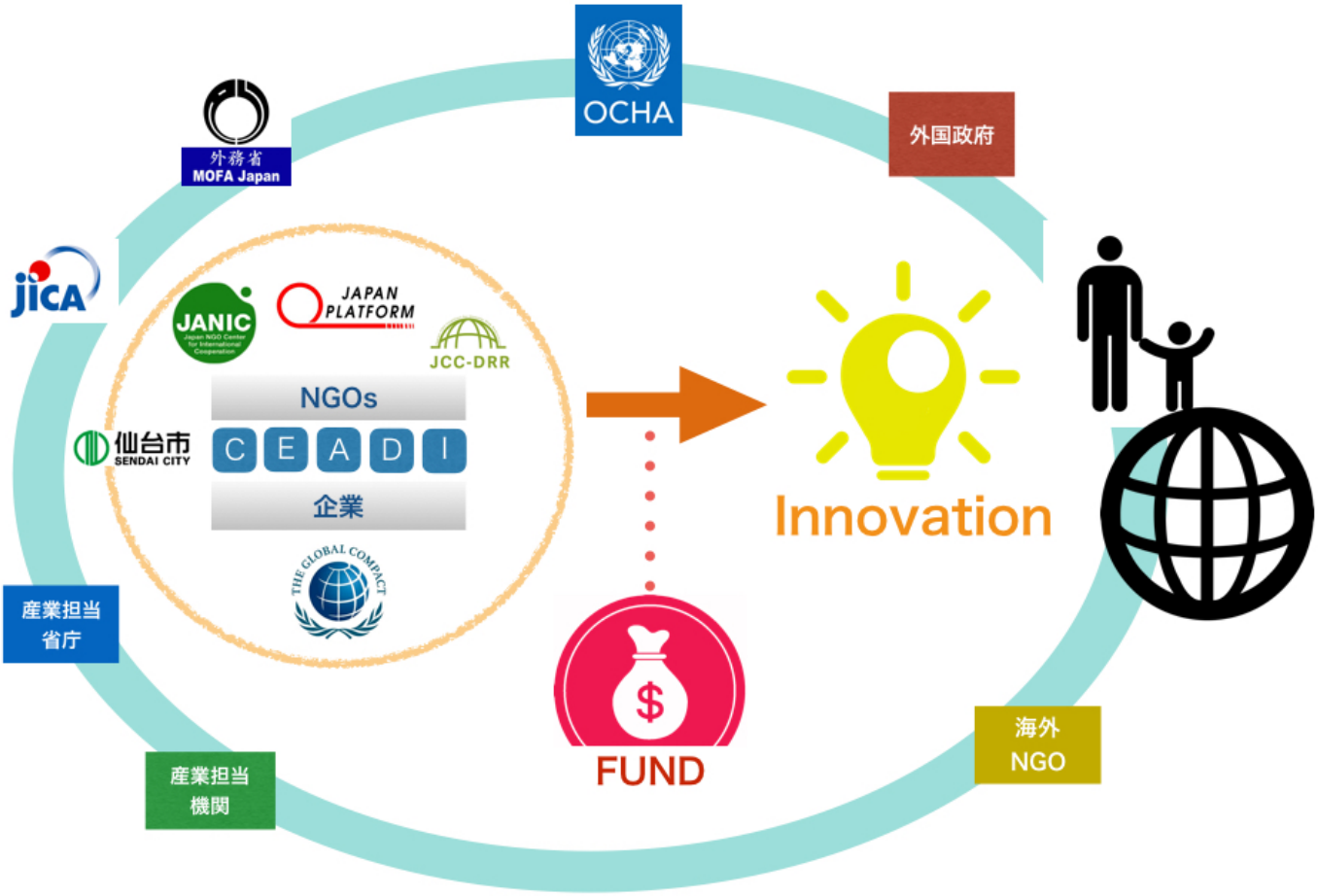
■Humanitarian Innovation Forum Japan 2016 当日のプログラム予定（3月13日）

時間	プログラム	備考
10:00 –10:15	主催者ご挨拶・プログラムの説明	
10:15 - 10:45	基調講演	人道支援イノベーションの未来図について
10:45 - 11:15	これまでの事例プレゼンテーション	人道支援にイノベーションをもたらした事例の紹介
11:15 - 11:30	問題テーマ説明	グループワーク参加企業へは共有済みの、4つのエリアと問題テーマの会場への説明
11:30 - 12:30	昼食休憩・グループワーク部屋へ移動	
12:30 - 14:30	グループワーク①　イノベーション考案	問題テーマにどのようなイノベーションを生み出せるかを議論
14:30 - 14:45	休憩	
14:45 - 15:45	グループワーク②　方法論レビュー	①での進め方について振り返り
15:45 - 16:00	メインホールへ移動	
16:00 - 17:00	グループ発表	4つの問題テーマについて、①と②の両方を会場全体へプレゼンテーション
17:00 - 17:30	クロージング・閉会のご挨拶	
18:00 - 20:00	意見交換会	任意参加（事前登録）

Humanitarian Innovation Model ver.1.4

参考資料

The Whole HIF Collaboration Scheme



2016 JPHIL

Humanitarian Innovation Model

5 Stages of Effective Work between NGOs and Enterprises

単に「企業の技術 → 現場へ適用」というリニアなフローではなく、
各フェーズにおいて企業とNGOが協働し、イノベーションを共に生み出すためのプラットフォーム

・ローカルパートナーと協力し、現場の最新の状況を把握してデータベース化できるネットワーク	・現場のニーズをソリューションを考えやすい形に分解、要素を組み直して伝えることが重要	・優先順位を見極め、施作導入後の効果・レバレッジをできるだけ正確に予見し仮説を立てる	・こちらからの押し付けではなく、いかに現地の自発的な動きや努力を促進できるかを考える	・技術そのもののみならず、実行するフローや過程・環境において問題が無いかを把握する

NGOs

現地での情報収集	解決策を導ける形へと翻訳	新しい解決法の考案	受け入れ・実施体制の構築	実施とフィードバック
Comprehend 把握する	Edit 編集する	Apply 適用する	Develop 開発する	Implement 実行する
技術・ノウハウの棚卸し	使いやすい形へと翻訳	新しい解決法の考案	柔軟なローカライズ	フィードバックからの改善

今回のフォーラム対象範囲

企業

・社内の各部署から、人道支援に適用できる可能性のある技術やイノベーションを収集できる体制づくり	・技術の開発時とは違った用途や、新しい別の活かし方を見つけられる柔軟な発想とフローの構築	・常に新しい技術を適用する必要は無い。高機能すぎない、それ自体に柔軟性やレジリエンスを内包した技術やノウハウが重要	・作り込み過ぎず、現地に工夫できる余地を残す。あらゆる工夫を講じ、コストを下げる努力をする	・フィードバックに対し、製品やサービス改変に素早く対応できる体制の構築

2016 JPHIL